

## 音楽の楽しさやおもしろさを感じながら主体的に音楽づくりに取り組む子どもを目指して

佐渡市立小木小学校

川崎 友子（平成 18 年度）

### 主張

音楽づくりにおいて、子どもに音楽の楽しさやおもしろさを感じ取らせるためには、既習事項や新しく得た知識を使い、自ら課題解決に向かえるような学習過程を工夫することが必要である。そのためには、「なぜだろう、知りたい」「自分でもやってみよう」と音楽の要素への興味、関心をもたせるとともに、自分の思いを膨らませながら友達との協働的な活動の中で試行錯誤して音楽づくりに取り組めるような展開にすることが大切である。その一連の学びの中に、主体的に音楽づくりに取り組む姿が表れるのである。

そこで、本研究では、音楽の楽しさやおもしろさを感じながら主体的に音楽づくりに取り組む子どもを目指して、授業改善を図る。

#### 1 研究主題設定の理由

これまでの自分の音楽づくりの授業を振り返ると、教師から提示する一方的な課題や手立てが多かった。「一方的な」とは、子どもの発言や考えから引き出されたものでなく、教師の意図で設定した、という意味である。このようになってしまうのは、子どもが感じたことや気づきを価値付け、音楽の要素への興味、関心を基にしたためあてをもたせるような手立てがなかったためだと考える。そのため、子どもたちの中には「解決したい」という純粋な気持ちだけではなく、「しなければならぬ」という使命感のようなものがあつたのではないだろうか。私がこのように考えるのは、次のような子どもたちの振り返り記述からである。

- ・難しかった。 ・音程をがんばってとることができてよかった。 ・つられずに演奏できた。  
(5年生『インターロッキングの音楽をつくろう』9名中3名の記述より 令和元年11月実践)
- ・最後のベルの音が合ってよかった。 ・失敗をしたところもあったけど、全員でリズムを合わせられてよかった。
- ・みんなリズムがとれていてよかった。  
(6年生『役割を決めて音階をもとにした音楽をつくろう』10名中3名の記述より 令和3年1月実践)

この振り返りは、音楽に苦手意識をもっている子どもが書いたものである。自分の思いよりも、つくった音楽の演奏がうまくいくことや、合わせられることの方に重点を置いていることが読み取れる。また、活動の様子からは、進んで音やリズムを試したり友達と話し合ったりする意欲的な学びの姿ではなく、友達の意見に従い、決められた通りに演奏しようとする姿の方が多く見られた。音から感じ取ったことを自分の言葉で表現したり探求したりすることで得られる音楽の楽しさを味わわせるためには、音楽の要素への興味、関心を基にしたためあてをもたせることが必要である。

学習指導要領解説「第4章 指導計画の作成と内容の取扱い」の2(6)イには、「どのような音楽を、どのようにしてつくるかなどについて、児童の実態に応じて具体的な例を示しながら指導するなど、見通しをもって音楽づくりの活動ができるよう指導を工夫すること。」とある。子どもに見通しをもたせるためには、どのような音楽をどのようにつくるかという思いや意図を膨らませることが大切だと考える。思いや意図を膨らませることで、自分にもできそうだと自信をもたせることができるため、音楽に苦手意識をもつ子には、特に必要不可欠である。その上で、友達と協働的に音楽づくりに取り組むことができれば、主体的に学ぶ姿につながっていくだろう。

そこで、私はこれまでの音楽づくりの授業における課題や手立てを見直し、どの子も音楽の楽しさやおもしろさを感じながら主体的に音楽づくりに取り組む姿を目指したいと考えた。

#### 2 研究仮説

音楽づくりの指導において、音楽の要素への興味、関心を基にしたためあてをもたせ、協働的な課題解決の過程を工夫すれば、どの子も音楽の楽しさやおもしろさを感じながら、主体的に音楽づくりに取り組むだろう。

### 3 研究の進め方

- (1) 目指す子どもの姿：音楽の楽しさやおもしろさを感じながら、主体的に音楽づくりに取り組む姿
- (2) 目指す子どもの姿を実現させるための手立て
- ① 音楽の要素への興味、関心を基にめあてをもたせる。
  - ② 協働的な課題解決の過程を工夫する。
- (3) 検証方法

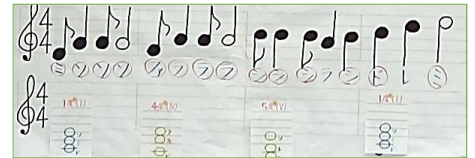
抽出児童や学級全体の様相をワークシートや授業記録をもとに分析し考察して、2つの手立ての有効性を検証する。

### 4 研究の実際

- (1) 実践Ⅰ『和音に合わせてせんりつをつくろう』（佐渡市立小木小学校5年生20名 令和3年6～7月）

ここでは、和音に合う旋律づくりを行った。導入段階で、和音と旋律の関係に意識を向けさせるために、比較聴取を行った。対象は、和音と旋律が合っている演奏と、和音と旋律が合っていない演奏である。子どもたちは、「何かおかしい。」「きれいに聞こえないのは何でだろう。」と、和音と旋律が合っていない演奏に違和感を抱いていた。その後、和音と旋律が合う秘密を探ろうと、和音と旋律を表した拡大楽譜（写真①）を比べ、子どもたちの発言をもとに色分けして示し、考えさせた。ここで得られた「和音の音を使って旋律をつくるときれいに聴こえる」という知識を全体で共有し、旋律づくりの活動に入った。旋律づくりの活動は、以下の条件を与えて行わせた。

- 【条件】**
- ・ 4人グループ ・ 4分の4拍子で8小節
  - ・ リズム例（4拍・4種類）からリズムを選んでよい。



<写真①：拡大楽譜>

グループは、子どもたちの人間関係を考慮し、互いに意見を話しやすいメンバーで編成した。また、リズム例は、みんなで手拍子を打ちながらつくったものを提示した。どのグループでも、「これだと終わりの感じがするから（音を）変えよう。」「『茶色の小びん』みたいに繰り返さない？」と、つくっている音楽の感想を互いに伝え合う主体的な姿が見られた。

#### 考察

振り返り①の記述には「（和音の構成音と旋律を）同じ音どうして組み合わせることで明るくなったいろいろな音いろがきこえてきた」とあり、小節内の和音の構成音と旋律の音の関係を意識した結果、音楽の聴こえ方が変わったことに気付いたことが読み取れる。また、振り返り②と③からは、旋律づくりで和音の構成音のどの音を使おうか悩み、和音と合う音がどれか試行錯誤しながら旋律づくりをしたことが分かる。そして、振り返り④を書いた子は、4小節目の最後の音を変えたことで5小節目へスムーズにつながったことについて、「こんなにも曲が良くなることにビックリした」と記述している。また、『茶色の小びん』と同じ和音を使っても違うイメージの音楽になり、友達に「すごいね。」と感想を伝えていた様子から、自分たちのつくった音楽がどう変化したかを考えていたと分かる。振り返り①～④の下線部にあるように、和音との関係を意識した旋律づくりを「楽しい」と感じ、めあてをもって音楽づくりに取り組めたと考えられる子は、全体の73.6%となった。

<振り返り①>

同じ音どうして組み合わせることで  
明るくなったいろいろな音いろがきこえてきた  
ことがたのしかったです。

<振り返り③>

すべての音が（せんりつ）和音に合っていないと感じ  
ました。合う音もあれば、あわない音もありました。  
合ったり合わなかったり考えるのが楽しかったです。

<振り返り②>

和音とせんりつに同じ音が入るとよりきれいな音になることが分かりました。  
せんりつ作りのときどの和音の何の音を使おうかやってみました。  
和音と自分達が作ったせんりつが合ったらきれいな音になるときが  
楽しかったです。

<振り返り④>

1つ音をかえただけでこんなにも曲が良くなることにビックリした。  
同じ和音を使っているのに全ぜんちがう曲のイメージになる  
のがびっくりした。

また、4人グループとした活動形態は、友達と試したり話し合ったりしやすい環境であり、73.6%の子が試行錯誤しながら協働的に音楽づくりができた。これまでに主体的に音楽づくりに取り組めた子は、令和元年度実践の『インターロッキングの音楽をつくろう（佐渡市立八幡小学校5年生）』では66.7%（6/9名）、令和3年度の『役割を決めて音階をもとにした音楽をつくろう（佐渡市立八幡小学校6年生）』では70%（7/10名）であったことと比較しても、実践Ⅰにおける2つの手立ては有効だったと言える。一方で、音楽に苦手意識をもっているため旋律づくりに難しさを感じ、協働的に取り組めなかった子が3名いた。自信がない上に、自分の考えやその根拠となるものをもてなかったことにより、意欲を持続させられなかったことが原因だと考えられる。どの子も自分の思いが更新されるような仕組みをつくる必要があると考え、より展開の仕方を工夫し、実践Ⅱを行った。

(2) 実践Ⅱ『まとまりのある沖縄の音楽をつくろう』（佐渡市立小木小学校5年生20名 令和3年11~12月）

ここでは、まとまりのある沖縄の音楽づくりを行った。まず、「不思議な木琴」と称したオルフ木琴（沖縄音階の音だけをセットしたもので、沖縄の雰囲気をもつ旋律をモデルとして聴かせた。「どうして？」「おもしろい」と声にしながらか度も聴くうち、「どうたたいも沖縄の雰囲気になるのはどうしてだろう」と、使われている音に注目し始めた。そこで、全員が自由に音を鳴らせる環境を整え、オルフ木琴を鳴らすことで自然と沖縄音階に親しめるよう即興的な音楽づくりの時間を長く設定したところ、思いを膨らませることができ、全員が2小節ずつの「Myせんりつ」をつくることができた。それにより、「もっと音楽らしくしたい」「こんなリズムにしたらどうか」とイメージが広がり、まとまりのある沖縄の音楽をつくるために思いを膨らませていく姿につながった。

その後、2人で「ペアせんりつ」をつくり、最終的には2つの「ペアせんりつ」を組み合わせる4人グループで沖縄の音楽をつくった。音楽づくりの条件は、以下の通りである。

<b>【条件】</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4人グループ ・Myせんりつ…4分の4拍子で2小節</li> <li>・ペアせんりつ…Myせんりつを2つつなげる ・ペアせんりつを2つつなげ、グループでまとまりのある音楽へ</li> </ul>
-------------	---

**考察**

これまで、一人で旋律をつくることは音楽を苦手と感じている子にとって難しいのではないかと思っていたが、今回のように、「どの音でも沖縄の雰囲気が出る」という安心感をもたせたり、リズム例を示したりすることによって、どの子も一人で一つの旋律をつくることができ、「個→ペア→グループ」という形態へと広げることができた。また、振り返り⑤⑥のような記述（キーワード：反復，変化，順序，音の高さ，終わりの音）から、「不思議な木琴」への興味，関心を基にしたためあてをもち、まとまりのある沖縄の音楽づくりに主体的に取り組むことができたと考えられる。そのような子は、全体の83.3%（15/18名）となった。

<振り返り⑤>

沖縄の音楽に似てきた曲になりました。音がどの順番でならんでいくかを考えることができました。最後エトにするときれいになったので嬉しかったです。

<振り返り⑥>

最初は明るく最後は暗くという音にしたらうまかったです。

<振り返り⑦>

いい考察になって、[ ]さんの言葉でよくなりました。やるのは、むしろ、たけと楽しかったです。

また、振り返り⑦からは、友達の考えによって変化した音楽のよさに気付いたことが読み取れる。この子は、実践Ⅰの途中から意欲が下がり、グループでの旋律づくりで協働的に活動する姿があまり見られなかったが、実践Ⅱでは、体でリズムを取りながら聴いたり、自分から音を鳴らして試したりと、最後まで意欲を持続できたことで主体的に音楽づくりに取り組むことができた。さらに、音楽に苦手意識をもつ子たちが、友達の意見をただ受け入れるだけでなく、「こうしたい。」と発言したり、「そっちの方がいいね。」と相手の意見を認める発言を進んでしたりしていた。このように、89.4%（17/19名）の子が協働的に活動することができたと考えられる。



## 5 結論

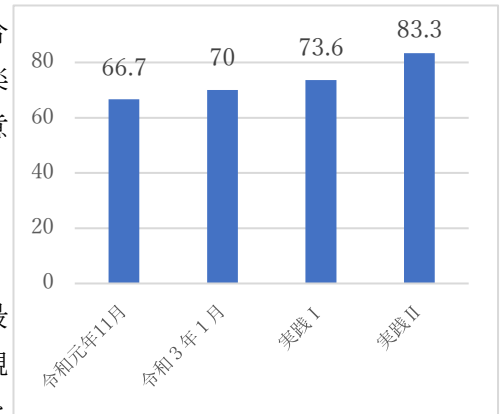
### (1) 音楽の要素への興味、関心からめあてへ

実践Ⅰでは、拡大楽譜を活用した結果、これまでより高い割合で、主体的に音楽づくりに取り組むことができた。一方で、音楽の要素に興味はもてても、音楽づくりの活動に難しさを感じ、意欲が持続できない子もいた。

実践Ⅱでは、「不思議な木琴」で沖縄音階の音を聴かせることで、そのおもしろさや不思議さに興味、関心を抱き、「やってみみたい」という思いをもたせることができた。そして、実践Ⅰで最後まで意欲的に活動できなかった子たちも、自由に沖縄音階に親しむ即興的な音楽づくりの時間の中で、その「やってみみたい」という思いを膨らませることができ、最後まで主体的に音楽づくりに取り組むことができた。

これらのことから、音楽の要素への興味、関心を基にしためあてをもたせることを大切にし、最初からつくる音楽の完成形を目指すのではなく、思いを膨らませられるような過程を工夫したことで、最後まで主体的に取り組めたと言える。ただし、グラフ①からも分かるように、実践Ⅱでは主体的に取り組めた子が更に増えた要因として、この手立ての他に、次の手立ても関係していると言える。

<グラフ①：めあてをもって取り組んだ子>

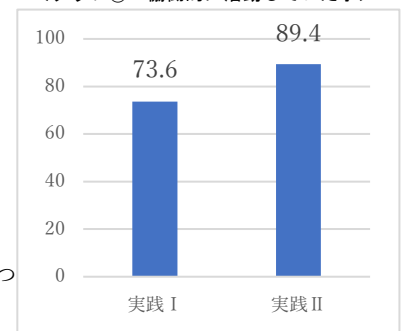


### (2) 協働的な活動形態の工夫

実践Ⅰでは初めからグループでの活動とし、意見を言いやすい環境となるよう人間関係を考慮して4人で編成したところ、ほとんどの子が協働的に活動できた。さらに実践Ⅱでは、「個→ペア→グループ」という順での活動形態をとった。活動が進むにつれ、「もっとこうしたい」という思いが更新されていき、最後まで主体的に取り組むことができたと考える。また、「My せんりつ」をもとにすることで、どの子も自信をもって試したり話し合ったりする姿につながった。

よって、人間関係を考慮したグループであるとともに、自分の考えをもたせられる手立てを講じて、子どもが思いを更新できるように活動形態を工夫したことで、どの子も主体的に取り組むことができたと言える。

<グラフ②：協働的に活動していた子>



<写真②：グループで音を試す様子>



<写真③：友達の意見をメモする様子>

音楽づくりの指導において、音楽の要素への興味、関心を基にしためあてをもたせ、協働的な課題解決の過程を工夫したことで、どの子も音楽の楽しさやおもしろさを感じながら、主体的に音楽づくりに取り組めるようになった。

## 6 成果と課題

○音楽の要素への興味、関心をもたせることを大切にすることで、子どもはめあてをもち、主体的に音楽づくりに取り組めると分かった。また、どの子も自分の考えをもち、思いを更新させながら音楽づくりに取り組むことができるようにするため、活動形態を工夫することが有効であることも明らかになった。

△音楽づくりの一連の活動の中で、音楽的な見方・考え方を働かせている場面をより詳細に見取り、有効な手立てについて追究していく必要がある。